

<千住>公園でインタビューを行った。酔っ払いの人に文句を言われた。

- ・高齢者の方から頂いた意見。「高齢者110番」、「給食サービス」、「住宅サービス」のエイブルが注目を集めた。高齢者向けのアパートがないと思う。自分たちはそれほどお金を要らないと思っているのに、若い人たちからもっと要るように思われている。というような意見だった。
- ・こちらの感想として。項目が多いので、どうしても長い時間がかかってしまい大変である。
- ・いきなり高齢者の方に質問をぶつけるのは難しいのではないかと、踏み込んだエイブルはなかなか出てこない。

表のボリュームが大きくて、インタビューを受ける人の負担が重過ぎるという意見はどの地区でも共通していた。またエイブルの内容が誰にでも適合するものではないことや、犬のことなどこちらで考えつかなかった意見も多く出てきた。

II これまでの全体の総括・反省

- 14:45～15:00 総括の説明
- 15:00～15:15 一人で考える時間
- 15:15～15:50 二つの質問におけるシェアリング
- 15:50～16:30 これまでのまとめ

まず、この3ヶ月間の毎回のプログラムの内容を振り返り、経過を思い出す。

- 4月6日 ウォンツ・エイブル分析をやってみる。
平山先生からのキーワードは「声を集める」、「実行可能な計画を作る」
- 4月9日 PDM（事業構想表）を作る。
マッピングを行った。
ウォンツデータの収集を行う。
区民のニーズを知る。個人にウォンツを考えてもらう機会を与える。
- 6月13日 ワークショップによる棒グラフの作成。
全体像を把握してもらうのが目的。目的系図作りの準備
- 6月21日 目的系図と簡易PDM作成。
高齢者エイブルをより深く読み取ることが目的
- 7月6日 高齢者の方（推進員さん）が参加して目的系図の修正を行う。
- 7月8日 衆目評価を行う。（より広い住民の意見をくみ上げる。）

Ⅲ. 全体の総括；全体のシェアリングについて

<疑問に思うこと（保健婦さん）>

以下のような意見が挙げられた。

- * 推進員の参加に対する疑問が残る。参加してもらうなら、毎回参加してもらった方がよかったですと思う。
- * より多くの人の意見は聞けるのか？言葉数の少ない人がいた。グループが大きすぎたのが原因だろうか？
- * ウォンツがどれだけ本心を反映しているのか？少数派のウォンツはあまり考慮しなくてよいのか？
- * 行政エイブルはウォンツへの支援か？それとも個人エイブルへの支援か？
(ウォンツに対するエイブルが個人で作れない時、行政がエイブルを示す必要があるのでは？「わたし」ではできないことも「わたしたち」でできることがあると思われる。)
- * 今回のプログラムは手法のトレーニングなのか？ 計画実施へのアプローチだったのか？

<学生の反省>

足立区、学生間の連絡不足があった。学生は経験不足なので、準備、進行において不十分なところがあった。経験の多い保健婦さんにもっとアドバイスして頂いた方がよかったですと感じた。また、ウォンツに対するエイブルが個人では思いつかない時、ワークショップにより解決していくことをもっと重視するとよかった。

<先生のコメント>

プログラムの目的が手法の学びであったのか、計画実施へのアプローチであったのかについて。どちらに重点をおいているのか、お互いに共通の認識があってもよかったと思う。目標が明確なほど、より率直に色んなことが話せたと思う。何か遠慮が働いていたのかも知れない。

<今回のプログラムをどう足立区の計画作りに利用するのか（保健婦さん）>

次のような意見が挙がった。

- * グループ作りの手法として利用できる。世代間交流の場にもなりそう。
- * ほかに多くの部署や専門職が加わった方がいいと思う。
- * 手法の応用が必要だと思う。そのままでは使うのが難しい。
- * ボードに意見を出し合っ、みなで共有し合うのはよいと思う。
- * テンシースや衆目評価は短時間で関心度が分かるので利用したい。

まとめとして声を集める手法として使えると思った方が多かったようだ。ウォンツを集めたところから目的系図を作るところがもっとも難しく、キーになるようだ。

<まとめ>

(平山先生) ウォンツのとり方がまずかった所があると思う。足立区60万人に一つの系図を作るというのは無理があった。適正規模の問題を考慮するべきだと思う。(使い方や手法にもよる) 規模が大きくなると、それだけ内容が標準化しやすい。テーマを絞るか、規模を縮小するのかの選択も必要になる。

(長谷川さん) 多くなるほど多様性が生まれるので、結果として内容が標準化する。町の特徴や、個人の歴史によって変化が生ずるはずなので、コミュニティーの特色を捉えることが必要だ。地域を絞ってステイクホルダー (Stakeholder : 関係者) をはっきりとさせる、関係者分析が重要である。

(島津さん) みなさんがとてもまじめに取り組まれていることに驚いた。ただ、衆目評価ではエイブルが多すぎて、エイブルの選択はとても難しかったと思う。初めにプログラムへ参加する意義を考えることが大切。調査は統計だけでなく、質的な面も重視する必要がある。

(学生) 参加型手法は緊張をほぐすアイスブレイキングとして、また計画を修正しながら進めていけるところが優れていると思う。

(小川先生) 理論を持っている学生と、現場を知る保健婦さんの連携が素晴らしいと思った。保健婦さんがプログラムの中から、多くのことを吸収されていた。

(佐々木さん) 住民と手を組んで何かを行っていくのが次の時代へのステップとなる。その意味で、この度の参加型手法をどうしても保健婦さんに勉強してもらいたいと思っている。保健婦さんは毎日の仕事が研修であり、試行錯誤の中で仕事を続けるもの。「計画作り」から「活動作り」へと変換していくことが今後の課題であり目標である。

(平山先生) ぜひ足立区独自の手法を作って欲しい。目的に合わせて、利用する手法も柔軟に変えていくことが大切。PCMはPDM以上に役立つことがある。

実践の豊富な保健婦さんにとって新しい概念を学べたこと、経験の乏しい学生にとっても貴重な体験の場が与えられた事、参加型手法についての理解が深まったことは良かった。参加者一人一人にとって、とても素晴らしい勉強の機会であったことが実感できた。

7月8日 これまでの全体を振り返っての感想と反省（筑波大学関係者のみ）

足立区ワークショップの最終日で、当日午前の衆目評価の感想、ワークショップ全体を通じての感想について話し合いを行った。

（堤）ワークショップの学生の進行について。簡単にでもいいので、各段階の終了後にシミュレーションをするべきだと感じた。

（坂下）今日（7月8日）の午後の総括によって、これまでにワークショップでやってきたことが明らかになった。次回からはより多くの仕事を任されるようになりたい。

（川島）ワークショップに初めから関わりたかった。

（平松）とても面白い経験だった。筑波大側と保健婦さんとで、理論と実践をお互いに補え合えたと思う。ただし、話し合いの予定時間は守るべきであったと思う。

（浅井）衆目評価では積極的な人の意見ばかり集めてしまった感がある。サイレントマジョリティの重要性を実感した。

（渡辺）保健婦さんの進行がとても上手であった。保健婦さんたちに私たちが何か提供できたかどうか不安。

（野田）衆目評価では白昼、酔っている人に絡まれてしまった。が、その人たちからも意見を集めるのが、大切だったとも感じた。

（稲葉）衆目評価では家庭訪問をしたが、訪問前に保健婦さんと意見交換をすべきであった。全体を振り返ると、途中から参加したので、参加していなかった時のワークショップのビデオを見ておくとよかったと思った。

（江崎）毎回のワークショップ後の反省会をもっとしっかりやるべきだった。反省会で担当者を毎回決めたりして、より核心に触れた話ができたら次のワークショップでさらに深い話ができたとと思う。

（平木）衆目評価で高齢者の方の話に合わせすぎたのかも。もっとエイブルの選択についてお尋ねするべきだったかもしれないと思った。

平山先生からは、今回のワークショップでは、関係者分析を飛び越えて、目的分析に行ってしまったのが反省点であったという話があった。計画の対象者となる人たちのバックグラウンドについてもっと調べていればよかった。また、参加者が（特に新しく参加した人たちが）、PCM、PLAのような概念、ウォンツ・エイブル、マッピングなどの手法について頭の中でしっかりと整理しておく必要がある、と反省をした。

衆目評価の感想では、多くの人がアンケートに好意的な人ばかりから意見を集めてしまいやすいことを挙げていた。偏りの少ない意見調査を行うためには、あまり進んで話してくれない方からも意見を集めることが大切であるのかもしれない。また、「どのエイブルに何票入った」という数的なことだけでなく、高齢者の方の話からその方の考え方や生活にふれる質的な面も重要であることが分かった。

全体の反省には、3ヶ月間のプログラムに途中から参加した人が多く、反省会も不十分なところがあったため、毎回のワークショップで準備不足のところが多くでてしまったことがある。学生の進行でぎこちない所がでてしまったのも、このことが大きいと思う。全体の感想では、理論を生かせる実践の経験をさせていただき、とても楽しかった、という意見が多かった。

保健婦の感想（筑波大生の参加についてのアンケート）

下記の4項目について保健婦を対象にアンケートさせて頂いた。質問ごとに解答を列挙する。

① 全体の流れについて

- ・ 衛生部と筑波との打ち合わせを密に行うべき。先の見通しを立てて、何のためにやるのか、そしてやってどうなるのか、を明確にして話を進める必要があると思う。
- ・ 先の見えない進行にとまどった。しかし、学生さんの熱心な姿勢は継続への大きな力になった。
- ・ 全体のゴールがどこなのか？があいまいな状態だったので、参加者が毎回戸惑っていた気がします。それは区側の問題でもあるのですが。
- ・ 毎回、多くの学生の方を動員して、対応していただき、とても助かった。終了後の反省会で意見交換、次回の確認などができ良かった。住民の方々を交えてのディスカッションの際、学生の方々の存在はおおきく、その場の雰囲気も盛り上がり、活発な意見も多く出たと思う。
- ・ 回数を重ねるにつれて、練れてきたと思う。
- ・ 学生さんと保健婦の役割について説明は受けていたが、実際の場面になると、どちらがどの役割をするのかが分かりにくかった気がする。
- ・ スケジュール全体が最初に決まっていなかったため、どこがゴールなのか、どのようなステップを踏むのかについて予想がつかず、一層学生さんに依存的になっていたように感じる。
- ・ 短い時間の中で、最後までたどり着けるのかどうか不安だったが、とりあえず目的系図までたどり着けほっとしている。この先が不安です。何せPCM手法で計画作りをしたことがなく初体験だったので大変だった。
- ・ 時間が短い中で、順序だてて目的を確認しながら実行できていたように感じる。
- ・ 全体の作業工程が見えなかった。7月9日の午後の反省でも出ていたと思うが、今回の目的が手法の獲得なのか、現実的な「健康足立21」なのか、最後まではっきりしなかった。（しかしこれは関わり方というより調整の問題だと思う。）
- ・ もう少し打ち合わせをきちんとしたかった。

② 説明の仕方について

- ・ 個人差があると思う。分かりやすく説明される方と、分かりにくい点がある人とあったと思う。
- ・ 全体的に分かりやすかった。ただ6月13日の高齢者グループ担当の方は、もう少し工夫すると分かりやすくなると思う。
- ・ 分かりやすく、よかったと思う。

- ・ 難しい内容をやさしく、わかりやすく説明する努力がうかがえた。専門家と一般住民の同席した場での説明は、とても気をつかい大変だったと思う。
- ・ 個人により差がある。が、それぞれの持ち味をいかした説明をしていたと思う。全体的に分かりやすい。
- ・ みなさんすごく上手で分かりやすかったと思う。
- ・ 全体的にかたい感じで緊張感が伝わった。ポストイットや、紙に書いて重要事項を順じ示していくというのは分かりやすくてよかった。
- ・ 段階を経て、一つ一つ説明してくれたので、分かりやすかった。
- ・ 初めて参加する場合など、一度で理解することが難しいこともあり、繰り返し話してもらえるとよいかもかもしれない。
- ・ 例を出していただいたときは分かりやすかった。複数のことを一緒に説明されると、メモをとっていても最初のことが分からなくなってしまうことがあった。作業に入る前に、もう一度、まず一つ目は、ということで繰り返しの説明がほしかった。区民が入った時はさらにゆっくり丁寧な説明が必要だと思った。(区民も毎回同じ方が出席していないため、到達レベルがまちまちで大変だったと思う。)
- ・ 職員はいいのですが、住民の方に対しては、ほこりをもって地域で活動していることを少し誉めていただきながらの方が、よりスムーズであったように思う。

③ 各班ごとの実習の進め方について

- ・ 安心してられる進行と、心配してしまうような進行もあったと思う。もう少しリーダーシップを発揮してほしいと思う点があった。
- ・ 実習であるという位置付けが分かっていたなら、学生が区民に説明したり、インタビューしたりできたのではないかな？
- ・ 保健婦が説明している時の、サポート隊(学生さん)の動きがとても参考になった。
- ・ 参加者の意見をどんどんカードにしていく、目に見える形にしていく、という方法で話し合いが前に進んでいった。この方法はとてもいいと思う。いろんな場に使えると思う。
- ・ 7月6日の午前のグループワークで、住民の声を的確に拾い上げ、書き取る、素晴らしい技を見せてもらった。今後実際に地域に出て、ウォンツ・エイブル手法を実践する際のよい参考になった。
- ・ 各センターの担当をずっと通しで決めてあるとよかったと思う。お互いに話し合い、問題点の取り組みについて、やり取りできたのではないかな？
- ・ 事前に打ち合わせがあり、スムーズに進められたと思う。
- ・ グループ分けして進めていったので、気軽でよかったと思う。
- ・ 参加者みんなが話し合いに参加できるように配慮しているところがよかったと思う。
- ・ 東和は推進員さん(実5人、延9人)と自主グループの方(7月6日のみ3人)、保健婦などスタッフ(実4人、延13人)と、まとまった参加の仕方ができ、進行については大きな混乱はなかった。

④ その他お気づきのことがありましたらご記入下さい

- ・ 健康づくり推進員さん達から「学生さんたちとカードを並べて楽しかったです」との声が多く聞かれた。
- ・ 学生の方がみなさん、個性的、前向きで、とても好印象だった。関わり方の姿勢としては最高に素晴らしかったと思う。
- ・ 何度も練習を重ねるうちに、少しずつこの手法に慣れていく自分に気づいた。机上で考えるだけでなく、とにかく実践あるのみだと思う。
- ・ 最後の方とは顔見知りになり非常に楽しかった。学生さんと一緒に仕事ができる機会はめったにないので、若作りしてがんばった。また合コンする機会をぜひ作って欲しい。
- ・ 最後に皆で（職員も学生も）、手法の学習をしたんだということが分かった。それまでずっと計画作りをしていると思っていた。
- ・ 実際に各自主グループで声を集める時になかなか自分の担当していた障害者のグループで10以上書いてもらうのができなかつたので、なにか聞き出すコツがあったらと思った。なかなか30分くらい集中してもらうのも難しい感じだった。
- ・ 漠然と「あんなことを言っていたな」という住民の声を整理する方法として、これから活用したいと思う。
- ・ 学生皆さんの意欲的、かつ誠実な態度に触れ、新鮮だった。区民の皆さんにも若いエネルギーが享受でき、有意義な時間だったと思う。

保健婦のみなさん、温かい、貴重なご意見、どうもありがとうございました☆

筑波大学 参加者の感想

今回足立区の計画に参加させていただいて感じたこと

医学専門学群 浅井 宏友

WAやPCMと言う手法を理解できれば、将来どこかで使うことが出来るかもしれないと思っていました。また、一通りこのやり方を見ておけば、次からはモデレーターも出来ればと思っていました。しかし、毎回の話し合いや6月13日の足立区での活動を通して感じたのは、この手法に対する疑問です。具体的にあげると、本当に住民の意見を吸い上げているのか（モデレーターの考えを反映しているだけではないのか）・手法が複雑である（一つの計画になるとは思えない、統一されたものがない）・人数が増えれば増えるほど、意見のまとまりがなくなる・・・などです。また、最後まで感じたのは「住民参加」の難しさです。全ての段階において関わってくださる住民の方は、普段から発言力のある人、行政に好意を持っている人、であるように感じました。衆目評価がその溝を埋めることを期待したのですが、声をかけても逃げる人が多かったです。どこまで行っても、偏りある「一部住民参加」の枠からは逃れられないのではないかと、思うようになりました。理想の住民参加とのギャップを埋めるためには、あらかじめしっかりとした関係者分析をし、こちらから積極的にサイレントな人にもアプローチしなければならぬのであろうと思います。

少し分かってきたこともあります。この方法は、統一されたものではない。つまり、疑問をもったところは自分なりによりよいと思う方法に変更すればよいのである、ということ。そう考えると、少し頭がすっきりしました。

また、臨機応変な対応を考えると、政策を立案するのに、この方法が使えないと思えば、使わないこともありかなと思ったりもします。はじめから終わりまで、この方法を使うのではなく、「ここは使える。」と思ったところだけを部分的に使うと言う方法もありかな、と思いました。たとえば、ウオントだけをとりて仲間分けをしたものだけを政策立案者が眺めて、ニーズに合ったものをトップダウン式に政策決定に活かしたり、出来上がった政策を住民に提示して意見を仰ぐなどです。

振り返れば、マイナス面ばかりが見えてきますが、7月6日、8日と高齢者や地域の人とかかわった部分は理解しやすかったです。ただ、そのマイナス面がどこから来るのかと考えると、私が始めから関わっていないため、そして目的系図の作成に立ち会っていないための理解不足だと思います。つまりは、自分の認識が甘かったと言えるでしょう。一回でPCM手法が理解できるはずもなかったのです。何度経験したかというのが、PCMの理解とモデレーターとしての自信につながると思います。今回得られたものは、「私は貴重な‘一回’の経験ができた。」ということでしょう。

今回のワークショップを通じて、「知識としてのPLA」が「経験としてのPLA」に一步前進したのではないかと思います。たった一度の経験ですが、この積み重ねがより深い理解へとつながるのだろうし、こうした経験と積み重ねこそがPLA そのものだとも思っています。

頭で分かっているもうまく行かない、と言う事はたくさんあると思います。今回のワークショップも、計画を立て、時間配分などを行っていても、実際に高齢者の方や推進員の方に参加していただき、また衆目評価で家庭訪問などを行っていると、なかなか思い通りには行きませんでした。現場を知らない学生が机上の空論だけで計画を立ててきたことの誤りであったと、今は思います。現場で働き、実際に区民の方と接してこられている保健婦さん方との意見の交換、両者の間での対話が実は一番大切なんだ、と言う事を分かっているながらも、ないがしろにしてきた私たちの反省点です。緊密に連絡をとり、お互いに全体像を明確に把握する事は、計画を実施する上で最も大切な事であると言う事を頭で分かっているながら、計画の推進、目標の達成に目を奪われて実行しなかったのは怠慢でしかなかったと反省します。何度も大学側では問題にされながらも、それを保健婦さんたちと共有できなかった事は、損失だったとも思います。

そうした反省もありながら、PCM 手法、ウォンツ・エイブル分析から計画づくりを行う事の問題点、改善点を見出す事が出来たのも今回のワークショップを通じてでした。特に行政主導で参加型計画作りを行う上で、問題としなければならない事、特に解決しなければならない問題点（人材の問題、資源の問題、時間の問題、行政の立場と責任の問題）がたくさんあると言う事も学びました。これらを解決した上で成り立つ参加型の計画作りとはどういうものか？を考えなければならないと思わせるきっかけを頂いた事も今回の学びの一つです。

ここに書き切れないほどの多くの事を学んだのが今回のワークショップだと思います。高齢者の方の意見を聞き取る機会が得られた事、そこからまた一つ考えなければならない高齢者の問題を認識した事、生の声を聞く事ができた事などなど本当に書き切れるものではないでしょう。これが PLA(参加による学びと行動) の真髄だと思います。PLA は形があるものではありません。哲学や理念と言った漠然としたものです。ですから「これが PLA です！」とはっきりと明言できるものではないと思います。例を挙げ、「分かってもらおう」しかないのかもしれない。後は実際に体験して“自ら学ぶ”しかないと思います。しかし“自ら学ぶ経験”を味わった方は PLA がなんだったのか？を分かっていると思います。保健婦さんが「今後の活用には応用・改善が必要だ」とおっしゃりながらも「声を聞き取り、考えさせられるきっかけを与えられた事が良かった」とおっしゃって下さっている事に、今回のPLAの目的は達成されたのではないかとともに思います。

これを今後いかに活用していくのか？果たして行政で参加型を実践する事がどこまで出来るのか？など7月20日の報告でも議論となり、また新たに考えるきっかけを与えられました。小さな経験の一つ一つが“学びの場”であると言う事、これもまたPLAの真髄だと思います。佐々木さんが最後に「保健婦は日々研修だ」とおっしゃった言葉に大きく頷きました。学生も同じ事だと思います。究極的には「人生そのもの」がPLAだと思います。

そして参加型と言うのは、その学びと行動を一人ではなく、多数の中で行っていかうと言うものです。意見を交換し、他者方の気づきを受けて、また新しい学びを受ける。自分で出来る事は何か？みんなで作れる事は何か？を考える事が参加型の一番の成果だと思います。今回、こうして足立区の保健婦さんと出会えた事は私にとっても大きな出会いであったと思います。今後、保健婦さんが現場の中で気づかれた事（学び）と実践された事(行動)を教えていただきながら、意見の交換が続けられれば…と思います。

PLA に終わりはありません。目標も目指すべきゴールもありません。これと言った手法もマニュアルもありません。ただ経験を積み、一つ一つ形を作り上げていく過程にすぎません。でも、間違いなく前進していく過程だと思います。「何か分からないけど、でも何かはある」と言った感じでしょうか？それを今後どう活用し、どう実践していくのか？はまだまだ考えなければならぬ問題だと思うし、それを考える過程さえもまた PLA なのかもしれません。（とは言っても計画として参加型を活用するためには、やはりある程度の方法論などを見出す必要はあると思いますが…）こうやってしまっは、「やっぱり何だか分からない」となってしまうのですが、模索する過程を楽しみ、信じるままに行動していく事が大切なかもしれないと思います。

今回、このような場を提供して下さったみなさんに感謝します。
ありがとうございました。

.....
医学専門学群 江崎 歩

「健康あだち 21」に関わらせていただいて学んだこと、考えたことをまとめてみました。

【トップダウンとボトムアップ】

今回のワークショップに関わるまで、「住民が主役＝住民が自ら問題に気づき、解決に向けて組織をつくり、行動を起こすこと」という図式ばかりが頭にこびりついていた。だから、いつも当事者である住民が前に置かれるような社会だったらいいなあと思う一方で、いつもはそうはいかないよなあ、とも思っていた。社会におけるすべての活動が住民のウォンツからのみスタートしていたら、解決されるべき多くの問題が未解決のまま山積みになってしまうだろう。だから、トップダウンのアプローチで解決された方がいい問題もあるのだろうと、「住民が主役であること」と「トップダウンアプローチ」は相容れないものであるように理解していた。「健康あだち 21」に関わらせてもらって、「そもそも、『1人1人が健康でいきいきと暮らせる社会が実現されたいいなあ』っていう、最初にあるウォンツは、住民から自発的に出てきたウォンツではなくて行政のウォンツなんじゃないか。それなのに、本当に住民が主役って言うのかなあ」という疑問を抱くようになった。それについて考えるうち、「トップダウン VS ボトムアップ」という二分法的な考え方がおかしいのだということに気づいた。現実社会

では、「住民が主役」と言っても住民が行政の間違いに気づいて革命的な行動を起こすことばかりを指しているのではなくて、むしろ、行政のウォンツを実現するための活動が当事者である住民1人1人の多様なリアリティからかけ離れたものにならないように、彼らの十分な理解を得ながら、一緒に進めていくことが大切なのだと思います。当たり前のことに過ぎないのかもしれないが、このことを実感できたのは、わたしにとって大きな学びであった。スタート地点にある動機がトップダウンの活動であっても、いや、そのような活動だからこそ、住民とともに進めていくことが重要なのだ。

【保健婦さんはすごい！】

3月に平山先生から「健康あだち21」に外部者として学生が関わるという提案についてお話をうかがって以来ずっと、プロの保健婦さん相手に、地元の小学校でPLAを目指したワークショップを行なったことがあるというだけの学生がいったい何を教えるというのだろうと、この活動における自分たちの位置付けがつかめずにとまどっていた。だから正直言うと、3ヶ月間のうち最後の約3週間のをぞいてずっと、「自分たちに何かを教えるなんてできるわけがない！」という気持ちから知らず知らずのうちに保健婦さんたちとの間に距離を置いてしまっていた部分もあったし、逆に、現場での経験を通して日々考えておられる保健婦さんたちの、「参加」という概念や、今回行なった手法などについての非常に深い理解を過小評価してしまっていた部分もあったと思う。後者については、学生ミーティングにおける議論内容を今思い出しても赤面したくなる。7月8日の全体総括のときに出していただいた保健婦さんの意見には、「現場の重み」があった。わたしがいくら一生懸命本を読んで、「参加」とは何か？声をあげない人の声を拾うにはどうすればいいのか？…などと考えをめぐらせても、絶対に敵わないと思った。こんなにもわかっていらっしゃる人たちについてわたしたちは「参加」の意味を説明するかどうか、とかこれらの手法の背景にある考え方をきちんと理解していらっしゃるかどうか、とか随分馬鹿げたことを議論していたものだと思う。

今思えば、学生が何も教えられないとしてもそれは当然であり、むしろ「教えてもらおう」という気持ちを持って関係を築くことができればよかったと思った。学生たちが試行錯誤する様子は、保健婦さんたちにとってはさぞかし危なっかしく見えたことだろうと思う。それでも、最後まで暖かく見守ってくださったことに感謝すると同時に、もっとたくさん話し合う場を持ち、一緒にワークショップデザインを決めていくことができればよかったのに、と思った。

【日本という国における『健康』というテーマの持つ特性】

個人ができないことのうち、複数の人間が持つ「資源」や「場」を利用すればできるようになることは住民グループ（もともと存在するグループであったり、新たに作られたものであったり）で行い、行政が行なうのにふさわしいことは行政がやる。

基本的にはそのように理解していた。でも、突き詰めて考えていくと、常に上のようにすっきりした線引きができるのかどうか疑問になってきた。

問題は、自らのウォンツに対して「やろうと思えばできる」という意味で書かれたエイブルを、全ての場合においてその人がやろうと思うかどうかである。今回の「長期的な目で見た健康」のようなウォンツの場合、「そうであることが望ましい」ことも、「ちょっと努力すれば自

分にもできる」こともわかっていながら実際にはなかなか「できない」ことが多いから問題なのである。そこを掘り下げて考えないと問題の本質を避けて通ってしまうことになるような気がした。

今回、目的系図がどんどん「日本のどこで作っても同じになりそうな」ものになっていってしまった理由には、ウォンツを聞く時の質問が適切でなかったことや、例を挙げてごく個人的なエピソードから出てくるウォンツを書いてもらうように仕向けなかったこと、関係者分析が行なえていなかったことなどの他に、テーマの特性も絡んでいるのではないかと思った。

心も体も健康で生き生きと暮らせるにはどうしたらいいのかは十分にわかっている。そしてそれらが、自分にとってどうしようもなく実行不可能なものではないということも。でも現実には会社の残業続きで1日3回のバランスの取れた食事なんて無理なんだ、週末は運動するよりとにかく睡眠時間を確保しなきゃ、という人に、どんなサポートがあればそれらのエイブルを「本当のエイブル」に変えることができるのか、それをじっくり考えてもらうことこそが必要なのではないかと思った。

今回わたしたち学生が、あるいはわたしという一個人が、果たすべき役割を十分に果たすことができたかどうか、はっきり言って自信がない。けれども、このような機会を与えていただいたことは少なくとも自分にとっては学びの宝庫といった感じで、心から感謝します。

参加型の以前に必要なもの

医学研究科 豊川 智之

足立区に向かうたびに何かすっきりとしないものを感じていた。それは準備に対して、そして準備に対する自分の姿勢に対して不満があったからである。不満の原因を考えているうちに、それが大学院生としての甘さと相手に対する配慮が足りないことに気づいた。

足立区はクライアントである。その要望に応えることが自分たちの任務である。足立区が何を我々に要望しているのか。そのためには何をすべきなのか？大学院生として生温い環境で暮らしているとその辺りへの配慮が欠落してしまっている。自分自身に関しては特に足立区への連絡。内容やタイミングが悪かった。相手に何を連絡すべきか、何を聞き取り、何を感じるか、そのセンサーが働かない。不手際が目立った。

我々がクライアントに対して何ができるか？その引出しすらも整理されていなかった。あるいは場面によっては理解できていなかったこともあったであろう。そのため、クライアントの要求にきちんと応えられるものを持ち合わせているのかも疑問を抱いていた時があった。

クライアントの要求が何なのか？それさえも途中で見失っていたようにも思う。われわれに求められているものと、それに対して応える方法として何を用いるのか、これをもう少しきちんとした形で整理し理解しておけばよかった。場合によっては系図で書いてもいいのではないだろうか？「足立区の保健婦さんたちが〇〇の状態になるためには」というタイトルで。

これからの研究機関は外部との連携が重要になってくる。社会での経験が乏しい研究者は、

クライアントとの接し方という新たな資質が求められるようになるかもしれない。それらの配慮について未熟な我々のために足立区の関係者の皆様には大変ご迷惑をおかけしてしまいました。

一連の作業に携わることで私が学んでいる参加型の技法以前に、日本社会における共同作業や交流のモラルについて深く考えていかなければならないことを痛感しました。

最後になりましたが、最後の最後で体調を崩してしまい皆様に大変ご心配をおかけしました。体調管理の重要性も再認識しています。

.....

国際総合学類 豊田 義信

社会医学研究室では、今年の初めに、つくば市吾妻小で「より学校が良くなるには」という題で五年生の3クラスを対象にワークショップを一度やりました。小学校でのワークショップと今回の足立区での活動では、児童の、保健婦さんの参加による学び、気付きと行動が共通した目標であったと思います。これは参加型開発という分野でも必要とされている概念で、途上国の開発の現場ではいかに活動の決定権を住民に渡し、その活動を根付かせるか、住民のものとしてしまうかが焦点となっています。

今回のワークショップはその決定権を児童、保健婦さんのものにしていく過程なのだ、と身をもって学びました。自分の理想として、ワークショップの目標、日程決めから当日の準備、データの集計までの各段階で、児童、区民、保健婦さんが主導で進められればという考えがありました。しかし、ワークショップには段階があったのです。まず、ワークショップは、これからの活動の方針をきめる場で、その場に、いかに児童、区民の意見を取り込んで行くかが最初の目標だと思います。回を重ねる中で、私達（研究室のメンバー）がいかに児童、保健婦さんを参加させるかではなく、児童、保健婦さん主導のワークショップに私達がいかにお手伝いしていくか、という関係に変われるかが、最大の目標だと思います。

前回の小学校のワークショップではそのダイナミズム（変化）を目にする事は出来ませんでした。今回は保健婦さんが前に出てディスカッションを進行するという場面があり、保健婦さんの変化を一人で感じていました。

もう一つの学びとして、今後にいかにしたい事があります。それは、ワークショップの最中で関係者分析（この活動を行うにあたって誰が、どんな団体が関係しているのかを知るための分析）、そして関係者との関係を築く事が重要だったなと気づいた事でした。小学校では余りに児童を主役にしたため、先生の重要さに気づく事ができませんでした。結果として先生をワークショップの場から締め出すかたちになってしまいました。児童の活動を続けていくには先生こそ巻き込んでいかなければいけなかったのではないかと考えました。そして、研究室の学生と五年生の先生の良好な関係づくりが重要だなと感じました。今回のワークショップでも健康診断に参加する足立区民、参加しない区民、保健婦さん、区役所職員、足立区の健康推進員さんなど、重要な関係者がたくさんいて、どこから何を引き出せるのか、どこに働きかけたら

よいのかという初めの一歩があやふやであったな、と思います。反省を活かして、ワークショップ終了後でしたが、保健婦さんを交えて懇親会を持たせた事が良い思い出となりました。

感想

医学専門学群 西島 健

「東京都足立区で 200 万円の予算を付け、10 年間の保健事業を計画するプロジェクトをやろうと思うのだが、またと無い機会だから参加してみないか？」

この甘い言葉にだまされ、遊んで暮らせるはずの夏休みにこれまでの人生でもっとも睡眠時間のすくない週をすごすことになるとは、その時は想像もつきませんでした。このだまされやすい性格は何かしないと反省しつつ、4 月からの 4 ヶ月に感じたことを書いてみます。

自分がこの計画に参加したいと思った理由は、実際の現場でどのように仕事が行われているかを見たいと思ったからです。ウォンツだとか、PCMだとか、実際の作業を進める上で手助けとなりそうな方法のことについては、自分なりに理解が進んできました。しかしながら、これらが現実にもどう運用されるかということは、あまり想像できなかつたのです。もちろん、学生が保健婦さんに何か貢献できることがたいしてあるとは思いませんでした。授業もろくにでないうで、趣味や酒に打ち込んでいる若造たちが、現場でウン十年働き、感覚のとぎすまされているおばさま（おねえさま）方に、なにを教えられるんだ？というのが正直なところでした。その思いは、足立区の保健婦の方々と接する機会が増えれば増えるほど強くなりました。常に現場で働いている人の言葉には自信と説得力が感じられ、それは聞いていて気持ちの良いものでした。基礎研究をしている医師よりも、実際に患者と接している医師から感じるような、まさにあれです。そのような言葉の中では、理論や理屈というものは、自分の中で多少弱々しく聞こえました。理論と現場の融合という声が聞かれましたが、ちょっと理論の力不足だったかなというのが正直な感想です。

参加型の手法は時間も手間もかかる。くわえて、眼に見える成果というものは、なかなかその場にはいない人には分からないものだとすると、この様な方法が広く受け入れられていくのはなかなか難しいのでは無いでしょうか。ことに時間がかかるという短所になりうる側面は、参加型が万能でないことをはっきりと示していると思います。今回の試みに関しても、自分自身、このプロジェクトを行ったことは足立区にとって100%プラスだ、とはいいきれないところがあります。

しかしながら、筑波大学生にとってはなにものにも代え難い体験となったと思います。ことに理屈と暗記が大部分を占める医学教育をうけている医学生にとっては、なににも無いところから自分たちで骨組みをつくり共同作業で組み立てていくこの過程は、限られた世界以外の人と接する機会という意味でも、集団として何かを成し遂げていくという意味においても、素晴らし

い時間だったと思います。実際にこの4ヶ月の間だけでも、いろいろと自分自身勉強になりましたし、成長できたところがあります。

最後に、未熟な学生を受け入れて下さった足立区役所の皆様、このような機会を提供して下さいました。諸先生方、本当にありがとうございました。

.....

「住民参加は行政に有効か？」アマノジャクの考えに基づく散文 医学専門学群 野田博之

今回の足立区のケースはこの問題について、十分に考えさせてくれるものであった。まだ、頭の中は整理がついていないが、ここは一つ思い付くままに、しかし、少しひねくれぎみにそして否定的に住民参加と行政について考えていきたいと思う。

大昔から、「住民参加は良いことだ」ということは言われている。住民参加と言わなくても、「三人よれば文殊の知恵」というように色々な人に意見を聞くことはよいとされている。住民参加を否定する人はほとんどいない。だけど、本当に住民参加は良いことなのだろうか？「多くの人が良いと言っているから良い」というのはおかしい。もし住民参加がそれほど良いのならば、何千年もの人間の社会の中ですでに当たり前のように社会の仕組みとして確立しているはずではないか？世の中に絶対なんてありえない。住民参加にも何か欠点があるはずだ。もしかしたら、私たちは住民参加は良いという考えに馴化させられているだけなのかもしれない。私はアマノジャクなので以上のように考え、次のような問いについてアマノジャク的に考えてみた。

「住民参加は行政に有効か？」

この問いに対して

「住民参加は行政に有効ではない」と反論する理由として真っ先に頭に浮かぶものとして「住民参加は衆愚政治につながる」という答えがある。衆愚政治というと、第二次大戦中の日本などのことが頭に浮かんできた。

1914年（大正3年）に誕生した第二次大隈重信内閣。鉄道を使って遊説した大隈の人気は異常なほどで、駅頭には一目大隈を見ようと人々が殺到した。翌年の総選挙で大隈は原敬率いる政友会を惨敗に追い込む。人気に支えられた大隈内閣は、のちに禍根となる中国への21カ条の要求をつきつけ、これが結局、国際的に孤立するきっかけとなっていく。

もちろん、この場合は住民自体は大隈内閣を支持するという意思表示だけの参加であり、また、十分な住民参加としての意志疎通はなかったかもしれない。しかし、あまりにお粗末だと言ってもこの形もいわば住民の参加によるものである。住民が米騒動などに惑わされずにしっかりと情報を確認して意志を決定していたら、このようなことは起こらなかったかもしれない。

一人でも、正しいことを言っていればこのようなことは起きなかったかもしれない。けれども、もし自分一人だけが今、第二次世界大戦のころの日本に行って、住民参加で大戦を止めよう、終わらせようと思っても、出来るという人は何人いるだろう？やはり、勢いに乗ってしまった民衆を止めるのは難しいのではないかと？住民参加で政治を動かすには、物事が悪化する前から住民参加で意志疎通しなければ、難しいのかも知れない。

政策の特徴として、政策には強制力があるということがあげられる。政策は「〇〇しなければならない」ということを作ることが多い。「〇〇しなければならない」という考えや状況は人を苦しめる。「女性は食器を洗わなければならない。」「女性は育児をしなければならない。」「そんな年になってから大学に行くなんて…。」このような社会通念という強制力は人を追つめてきた。けれども、最近そのような強制力に対して社会は「寛容」になってきている。寛容。お互いの価値観や文化を認め合う、これからの多文化主義の世界で大切な概念。しかし、この寛容さはむしろ小さいコミュニティの中で、大きな力を発揮するのもかも知れない。大きなコミュニティの中では便利さや合理性を求めていくと単一の因子で物事を評価する方向に向かっていく。その大きな例として政策がある。政策は多くの場合、平均化された形に向かっていく。それは住民を平均化した架空の住民Aに対して作られているといえる。政策は多くの場合、「平均的な」住民が必要なものに行われる。ひねくれて言うと、だいたい、健康日本 21 自体が、全く健康でこれからも問題が無いという平均からはずれた人にとっては、もしかしたら「そんなことに金を使わなくても」というものなのかも知れない。衆目評価の中でこのような話を聞いた。その人自身も酔っ払いなのだが、他の酔っ払いをこのように非難していた。「おれたちは働いた金で酒を飲んでいるが、向こうの奴等は生活保護を受けて、その金で昼間から酒を飲んでいる。あんな奴等に生活保護を与えていいのか？」

社会の制度は、「平均的な」市民であるA君を想定して作られている。(ある特定の人を狙って作られたら問題です!)しかし、この平均的なA君に対する政策ではすべての人をカバーすることは不可能である。市民全員がA君にイコールだったり、近似だったりすることは普通はありえないのだから。どうしても、カバーされないマイノリティーが存在してしまう。生活保護は、「平均的な」社会の中では零れ落ちてしまうこの一部の人を救うために、その零れ落ちてしまう一部の人を「平均化」して制度が作られた。しかし、ここでこの酔っ払いが訴えていることが真実だとすると、このマイノリティーを救う為に作られた制度が、その平均化ゆえに、一部のマイノリティーの為に「悪用」(何をもって悪用と言い、どこまでが悪用か判断するのも難しいけれど、だいたい、今回の例が悪用と言って良いのかもわからない)されているのだ。

では、今回の例で制度が「悪用」されていると考えて、この状態を住民参加による政策でどのようにして解決できるだろうか？

解決方法は次の2つだろう。

①制度を「悪用」している人たちが、自分たちの行動に気づいて自ら変わる。

②制度を「悪用」している人たちが、「悪用」できないように制度を変える。

①の場合なら、気づきの場が作られれば良いだろう。政策はそのような「場」を作ること以外は必要ないかもしれない。

②の場合はどうだろう？まず、トップダウンで「悪用」と決め付けて制度をかえるのならば、

話は簡単である。政策を自分の（自分たちの）考えにしたがって、作り実行すれば良い。多分、「悪用」と決め付けられた人は怒るだろう。たとえ、本当に悪用していたとしてもいい気持ちはしないはずだ。必ず、その政策に反対するだろう。だけど、トップダウンとするなら、そのような意見を「踏みにじって」政策を実行することも可能だ。一方、住民参加で行うのならばどうだろう？ どうであろうと、意見を聞くという意味でも、まず、「悪用」している人たちに何らかの形で参加してもらう必要があるかもしれない。行政はこの人たちが意見を言える場を作る必要がある。

このように考えてくると、次のような考えにたどりついた。

政府の仕事は結局のところ「場作り」のみで良いのではないか？ いや、もしかしたら政府の仕事はすべて「場作り」なのかもしれない。代表が話し合う場を作る。（会議、国会）特別な権利（人を治すために与えられた医者の人をメスや薬で「傷つける」権利、警察の人を捕まえる権利、司法での人を裁く権利、行政をするなどなど）を与えて特別な仕事を出来るような場を作る。市民が普通はできないような仕事出来るようにする。すべて、社会に必要な「場」を作っている。政府自体もそのような「場」である。

次にこの特別な権利を与えられた人たちについて考えてみよう。あるドラマで良いセリフがあった。「権力を持たされたものは、少しの保身を考えただけでも簡単に人を殺せてしまう。」国をうまく動かす為には、どうしても一部の人にある権力を持たせざる負えないときがある。

（だって、医者や警官や弁護士がもしいなかったら、社会は成り立つでしょうか？）やはり、この時、その権力を監視するシステムはもちろん重要なのだが、心構えとしてこの「Putting the First Last」は必要なだろう。

このように考えると政策が上手くいく為に必要なことは次のようなことなのかもしれない。

①政府の管理者（行政のお偉いさん）に対する住民の Putting the First Last

現実離れした無理なことは注文しない。（これは、必要なことまで口に出さないこととは違う。だけど、今は現実には必要なことすらほとんど口に出せていないよね。）

③現場の実行者(保健婦さんなど)に対する政府の管理者（行政のお偉いさん）の Putting the First Last

弾力的に仕事ができる環境を作る。

③住民に対する現場の実行者（保健婦さんなど）の Putting the First Last

住民に参加してもらう。

ここで、政治家はどこに入るかということ、一応政治家は「代議士」と言われるぐらいだから、住民の中に入るだろう。住民の声の代弁者（声拾いの係？）という設定なので…。（本当かどうかは知らないけれど）

つまり、住民→行政の管理者→現場の実行者→住民という理想的な民主主義の中で作られた力が本当に働いていると仮定すると、（この仮定も正しく機能しているかは疑問ですが）それぞれがあまり無茶なことを要求しないという事が政策に大切なかもしれない。（必要なことが伝わること、当たり前の仕事ぐらいは行ってくれることぐらいはやってもらわないといけないけれども）

さて、この話を考えていると「じゃんけんでパーはグーに、グーはチョキに、チョキはパー

に勝つけれども、決して偉いわけじゃない。弱いもの（負ける方）の立場についても良く考えましょう。」という、なんだか道徳的な話に思えてきた。参加型アプローチは道徳などの昔からあるものをまとめただけなのかもしれない。ある会社の役員をしていた人からこのような話しをしてもらったことがある。この方は、組織や社会で上に立つ人の心構えとして次の2つをあげていた。

①偉い人ほど、頭が低くなっていくように

②上に立つ人は、下の人が動きやすくなるようにすることを第一に考えるように

③上に立つ人の仕事は、下の人の仕事の失敗の責任を取ることである。

これって、まさに Putting the First Last ではないだろうか？この人は、すでに何十年も前からこの Putting the First Last を使ってきたのだ。このような例は歴史を見ていくといたるところに出くる。このように、参加型アプローチは単なる「生活の知恵」を考え直したに過ぎない。ただし、単なる「生活の知恵」とは言っても、未だに教訓として、また、人との接しかたとして、話題に上ってくる。たかが「生活の知恵」だけど、されど「生活の知恵」のだろう。実際にこの「生活の知恵」は多くの役に立つし、また、忘れていたこともまた事実なのだから。

さて、参加型アプローチが「生活の知恵」なのならば、行政はこの「生活の知恵」をどのようにして、より多く得ることが出来るだろうか？もちろん、歴史からも得ることはできるし、また実際の仕事からも得ることが出来るだろう。けれども、より多くのそして、見本になるようなものはないだろうか？ここに一冊の本がある。「ソニーを踏み台にした男たち」。良い政府のモデルとして企業そして経営というものが参考にならないだろうか。考えてみると、行政というものは世界で一番大きな力を持つ企業である。政府は、行政サービスという商品を税金という形のお金と交換に売っている。また、逆に企業というものはいつもお金ばかり第一に考えているともいえない。あるときには、多少お金を損しても信頼や人的ネットワークを優先したり、また、人の幸せを運んだりもする。ソニーは世界の中でも成功した企業の一つだろう。そのソニーを江崎玲於奈氏は「organized chaos（組織された混沌）」と表現している。詳しい内容は割愛するが、この中で、私は部下に対する Putting the First Last を感じた。（それが意図してか、もしくはそうならざるをえなかったかは分らないが…）。この本で、ソニーという会社をこのように現している。「組織は、あつてなきが如く……ただし、自分から意思表示をし、行動を起こさないと、何もしてくれない。」個人は「何をやりたいのか」「どうしたいのか」という明確な意思を持ち、それを上の者に伝える努力をする。行政は個人が「何をやりたいのか」「どうしたいのか」という明確な意思」を持てるような「場」、また、すべての人が「意思を上の人に伝える」ような「場」を作る。そして両者とも Putting the First Last の考えを持って行動する。このような形が良い組織にそして行政のあるべき姿なのかもしれない。

しかし、ここで少しひねくれて考えてみよう。『個人が「何をやりたいのか」「どうしたいのか」という明確な意思」を持てるような「場」、また、すべての人が「意思を上の人に伝える」ような「場」を作る』ことができなければ、住民参加を目指す社会において、行政は役に立たないのか？このような「場作り」ができなければその行政は必要ないのか？国、都道府県、区、市、町、村。本当に社会に必要なのか？「国、都道府県、区、市、町、村。そのような組織は何の為にあるのだろう？」と考えたとき、私は「そのような組織は人と人とのつながりが生ま

れたとき、その人々の関係がよりスムーズになるために生まれ、そして存在している。」と考
えている。国が存在してはじめて人と人の関係があるのではなく、人と人のつながりが存在し
てはじめて国は存在する。役に立たない組織はいらない。人の為にならない行政に存在価値は
ない。もし、本当に住民参加による計画の限界が1万人ならば、それより大きな行政はもしか
したら自分の仕事だから無理してもやるとか言わずに、より下の行政または住民に **Putting
the First Last** (権限委譲) すべきなのかもしれない。

『個人は「何をやりたいのか」「どうしたいのか」という明確な意思を持ち、それを上の者に
伝える努力をする。行政は個人が「何をやりたいのか」「どうしたいのか」という明確な意思」
を持てるような「場」、また、すべての人が「意思を上の人に伝える」ような「場」を作る。
そして両者とも **Putting the First Last** の考えを持って行動する。』これがもしかしから「住
民参加は行政に有効か？」という問いの遠回しな答えなのかもしれない。

(注) : この文章はかなりいいかげんに思い付くままに、しかも相当ひねくれて書かれていま
す。筆者の本心とかけ離れていたり、あまりにも極端なことが書かれている部分もあります
がご了承下さい。住民参加について、考える機会になれば幸いです。長い駄文をお読みいただき
ありがとうございました。

(最後に)

以上のようにむちゃくちゃなことを書いてみたけど、やはり政策に住民参加は必要ではない
かと思う。

「洗剤がなければ、洗濯はできない。」洗剤(潜在能力)なしに洗濯(選択)をしてもいいけ
れど、汚れがひどい場合には(例えば、衆愚政治のように情報などが不十分な場合には)、き
れいにならない(大変なことになる)。行政は住民が洗剤(潜在能力)を手に入れられるよう
にお手伝いをする。あくまでも洗濯(洗濯)をするのは住民。行政が洗濯(選択)をしてはな
らないし、またこれからはそのような余裕もない。だから、今回、洗剤(潜在能力)を入手で
きるようにする方法と洗濯(選択)できる環境の作り方が書かれたマニュアル本(健康日本2
1の普及と評価のための市町村支援マニュアル)が作られたのだろう。

ワークショップを通じて学んだこと

環境科学研究科 平松 高志

●高齢者という存在

大学周辺に住んでいると同年代以外の人と知り合う機会は限りなく少ないです。そのため
高齢者に会ったのは非常に良い経験となり、人に会う重要性を改めて認識しました。

●ワークショップの進め方

私は高齢者のワークショップの時にタイムキーパーをしていたので会場内をぐるぐるして
いたのですが、班によって進め方が異なるのに興味を持ちました。モデレーターの進め方は
様々であり、机を使っている班もあれば、イスで円形を作って進めている班がありました。ま